The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『狂気な倫理』第III部の執筆者からの応答
Author(s)	柏﨑, 郁子; 北島, 加奈子; 小西, 真理子 他
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2024, 6, p. 73-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94561
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集１　第９回臨床哲学フォーラム（シリーズ：規範の外の生と知恵）
テーマ「狂気な倫理：「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定」

『狂気な倫理』の総評に対する執筆者からの応答
（評者：檜垣立哉）

柏﨑郁子、北島加奈子、笹谷絵里（＋小西真理子、河原梓水）

１　柏﨑郁子

素直すぎる、ナイーブすぎる、よく言われます。それこそ「素直」に受け止めれば「素直」であることは良いことでもあると思いますが、研究者としては無知を意味するということもわかります。私がナイチンゲールの vital power という言葉から何を引き出したいかというならば、実はそれほど大それたことではなく、せいぜい mental や　social に対比されるところの physical のことです。物質として、看護師が見て触れて手当てする実体としての身体・肉体のことです。そこで博士論文では、「生理学的」という言葉を使ってみたところ、それは何かと問われましたので、それは「物理と化学で説明を試みる自然」のことですと言ってみたところ、やはりナイーブさにおいて度を越しているという趣旨のご指摘を受けました。

その意味でも、「vital power の一展開がほしい」ここでそのようにご指摘いただけたことは大変ありがたいことです。そこで、あらためてナイチンゲールが vital power と呼んだものの正体を少し考え、「17 世紀論的数学科学論」は、私にとってはおそらく「無理ゲー」であり難しいですが、「二一世紀的にいう」ということをわずかながら考えてみたいと思います。

まず、このあとの議論で少し重要なので触れておきますと、ナイチンゲールは「病人やけが人の看護」のことを「本来の看護（nursing proper）」と呼んでいました（Nightingale 1882=1974:「病人の看護」97）。「予防的看護や衛生的看護あるいは健康な子供の看護」も重要だが、それは proper ではないとみなしていたことになろうかと思います。現代の日本で言うならば、病院で行われる主に急性期の看護は間違いなく proper な看護であり、福祉施設や公衆衛生分野での看護は proper ではない看護という見方になろうかと思います。そのうえで、主に具体的で基本的な、proper な看護の方法について書かれた教科書である 1859 年に書かれた『看護覚え書き』で、ナイチンゲールは次のように書いています。

> 皮膚を丁寧に洗ってもらい、すっかり拭ってもらったあとの病人が、解放感と安らぎとに満たされている様子は、病床ではよく見かける日常の光景である。しかし、そのとき病人にもたらされたものは、たんなる解放感や安らぎだけではない、ということを忘れ

てはならない。事実、その解放感や安らぎは、vital power を圧迫していた何ものかが取り除かれて、vital power が解き放たれた、まさにその徴候のひとつなのである。（Nightingale 1859: =2014: 159-60）

つまり、汚れたままの病人が塞いで見えるのは、汚れが心理的圧迫感をもたらすからではなく、汚れという物理的なものが皮膚を物理的に塞いでいることによって vital power を閉じ込めているからである。また、清潔にしてもらった病人がさっぱりとして見えるのは、心理的に安らぐだけでなく、皮膚の汚れの除去が物理的に vital power を解放するからである、ということです。ここからわかることは、ナイチンゲールは、清潔の援助という看護が心理的安らぎをもたらすとしても、それは物理的で実際的で具体的な「汚れの除去」という仕事の結果としてもたらされるのだ、と言っている、ということかと思います。

では、vital power を圧迫するような皮膚の物理的汚れとは何か。イギリスの若い皮膚科医モンティ・ライマンという人が *The Remarkable Life of the Skin*（『皮膚、人間のすべてを語る』）という本を書いて、昨年それの邦訳がみすず書房から出て、私の勤務先の学生が選んだ購入リクエスト本みたいなリストに入っていたのですが、その本によると、皮膚は、その構造と機能からするなら、「マルチツール」のような臓器としてみることができるそうです。

皮膚は表皮、真皮、皮下組織というようにいくつかの層にわけられますが、もっとも表面にある表皮は、「皮膚のバリア機能をほぼ一手に引き受け、身体のほかの組織に比べると格段に多い有害な刺激にも耐えている」（Lyman 2019=2022: 10）とあります。一方で表皮には、常時 1000 種類以上もの細菌がいるそうです（31）。そのほとんどは、「共生菌」といわれる「友好的」な細菌ですが、当然ながら悪事をはたらく「病原菌」もいるわけです。なかでももっともポピュラーなのが黄色ブドウ球菌ですが（34-5）、この細菌が悪玉であるのは皮膚に居るからではなく、皮膚のわずかなほころびに忍び込んで悪さをするところにあります。「湿疹ができるなどして皮膚のバリア機能が弱まると、黄色ブドウ球菌はそこから体内に侵入し」菌が生産する各種の毒素によって痛みや炎症を生じさせるのだとあります。

ナイチンゲールの時代には通常ではありませんでしたが、現代の医療では欠かせない各種のカテーテルは、皮膚を貫き体内の細胞に直接接触する異物ですが、その挿入物の表面に黄色ブドウ球菌が付着して血管に入ってしまうようなことがあれば、命にかかわることにもなりかねない。したがって体内に各種カテーテルを挿入する場合には滅菌物を用いて無菌的な操作によって細菌を避け、さらに挿入部はフィルムなどで密閉するのですが、体外のカテーテル接続部などの細菌侵入経路を 100%ブロックすることはできないので、一般に、患者の身体環境全体を物理的に清潔にして、トータルの黄色ブドウ球菌の絶対数を減少させることがカテーテル関連感染症を防ぐためにある程度有効だと考えられています。

ナイチンゲールの時代で言うならば、中心静脈などのルートがなかったとしても、やけどや怪我や各種外科的処置を受けた人などにおいては、皮膚というバリアが欠落している箇

所から細菌が体内に侵入することを防ぐ必要があったと思われます。そのためには、ナイチンゲールが繰り返し書いたように、病床環境を清潔にすること、患者の身体を清潔にすること、そして空気も入れ替えることが重要であるということになり、そうすることが、生物に本来備わっている vital power をよりよく解放することに繋がるのだ、ということかと思います。

加えて、この皮膚科医モンティ・ライマンの著書で興味深いのは、「触覚」というきわめて情緒的な感覚を皮膚の形態機能学的観点からしっかり分析している点です。ライマンによると、「無毛皮膚」（毛のない皮膚）である手の平や足の裏には、四種類の機械受容器（メカノレセプター）が埋め込まれていて（133）、

> これらはいずれも、基本的に圧力の変化と皮膚の変形に対して反応する。機械のように外界の変動を検出すると、別々の神経を介して脳に電気信号を伝達し、それに応じて身体が動くわけだ。四種類の受容器の形状は機能によって異なり、それぞれに弱みと強みがある。このメカノレセプターが一緒になってはたらくとき、ほとんど奇跡のような、すばらしいことが起きる。ここでは、日々起きている奇跡のひとつを分析することから始めよう。あなたが帰宅して家に入る場面で、触れるという感覚の複雑さを存分に味わい、胸を熱くしてほしい。（Lyman 2019=2022: 133）

とあります。ライマンはこのように、医者のくせに読ませる書き方がうまいと思います。

ここでライマンの言う「ほとんど奇跡のような、すばらしいこと」というのが何なのか気になりますのでここで少し紹介しますと、ライマンは、この四種類の受容器のうち、一番皮膚の浅い位置、すなわち表皮の基底層に位置する受容器、「メルケル盤」の機能から説明しています。家を出るとき、ポケットの中の鍵をガムの包みと区別して取り出す指先の感覚のメカニズムを例に挙げています。「メルケル盤」は、皮膚の浅い位置にあるだけでなく、特に指先に集中していて、「信じられないほどわずかな圧力で活性化されて、皮膚が 0.001mm 押し込まれただけでもその変化を感知する」といいます。そのときなにが起こっているかと言うと、「細胞が引き伸ばされると、ナトリウムが細胞外液から細胞内に流れ込んで活動電位と呼ばれる電気的スパイクが引き起され、神経に沿って信号が伝わっていく」この信号が脳に連続的に伝わることで、「ポケットの中の鍵」の「形、表面や縁の特徴に関するくわしい情報」がわかるというのです。これはたしかに「ほとんど奇跡のような、すばらしいこと」だと私も思います。

そしてこの「メルケル盤」のすばらしいはたらきを存分に発揮してもらうためには、皮膚の表皮が 0.001mm の押し込みを感知できるほど柔軟である必要があろうことが推察されます。もし、さまざまな汚れが厚く付着していたり、垢が蓄積して皮膚の表面が肥厚していたりしたら、このレセプターが十分にはたらかず、「ほとんど奇跡のような、すばらしいこと」が制限されてしまうでしょう。

こうして考えていくと、vital power とは何かということがおぼろげにみえてくるように思います。ライマンの言う「ほとんど奇跡のような、すばらしいこと」が身体の有する構造と機能によって起こっているというそのこと、のように理解しています。

２　北島加奈子

「端的にオリンピックも（私からみれば彼らもどこかおかしな身体である）パラリンピックも『成り上がり物語』であることを壊せるのか」という問いですが「『成り上がり物語』であること」は、壊せないと言うしかないと考えています。デービッド・パデューとデービッド・ハウ（David Purdue & David Howe 2012）は「パラリンピックのアスリートは選ばれたエリートである」と述べています。加えて、難民アスリートに対する国際オリンピック委員会（IOC）の言説を批判的に分析したダニエル・バードシー（Daniel Burdsey et al. 2022）らは「難民アスリートの大半は、移住し ROT（難民オリンピックチーム）に選出される以前から、スポーツに対する適性が並外れて高かった」と論じています。結局のところ、オリンピックもパラリンピックも選手はエリートであり、エリート同士の『成り上がり物語』だと思います。

また、オリンピック選手も「どこかおかしな身体である」というご指摘は、おっしゃる通りだと思います。最新（2021 年 8 月から有効の）オリンピック憲章第 10 条を読むと、そのスローガンは一部省略しますが「より速く、より高く、より強く」となっています。このスローガンは「オリンピズムに加えてオリンピックの理念としてオリンピック大会に影響を与えてきた」と、関根正美は 2019 年の論文（「オリンピックの哲学的人間学：より速く、より高く、より強く、より人間的に」92 頁）で述べています。「近代オリンピズムの生みの親」と言われ「より速く、より高く、より強く」を提唱したのは、ピエール・ド ・クーベルタンだとされています。そのクーベルタンの思想を批判的に評価したハンス・レンクは、関根（2019: 93 頁）の引用によれば「オリンピック運動における伝統的な人間像」の一つとして「最善を尽くして達成する人間」を挙げています。さらに、レンクによるならば「最善を尽くして達成する人間」は「並外れた達成をなす人間で」もあるのです（関根 2019: 96）。

「並外れた達成をなす人間で」あり「オリンピックを目指し出場しメダルを獲得する競技者は，日常を生きる人間存在とは異なる」と、関根は「オリンピックの哲学的人間学」96 頁で、はっきりと述べています。関根は、オリンピック選手の身体について直接言及したわけではありません。ですが、彼らは「並外れた達成をなす人間で」あり「日常を生きる人間存在とは異なる」とされることから、オリンピック選手の身体は非日常的な、檜垣先生の言葉で言うならば「どこかおかしな身体である」と言えると考えます。つまり、換言すればオリンピック選手は“異常な身体”あるいは、異形の身体の持ち主だということです。

しかし、（ここではどのような属性であれ、多数派に入るオリンピック選手に限定しますが）オリンピック選手とパラリンピック選手は同じ“異常な身体”の持ち主であるにもかか

わらず、観客やテレビ等の視聴者の反応は異なる場合が多々あります。オリンピック選手、すなわち健常者の異常な身体は並外れた達成をなす身体としてそのまま観る者に受け入れられますが、パラリンピック選手のそれは同じ並外れた達成をなす身体であるはずが、多くは“障害を克服した身体”といった言葉で語られます。“障害を克服した身体”とは言うものの、実際にそのパラリンピック選手の障害（インペアメント）が消失するわけではありません。それこそ、健常者が抱く空想です。ここで荒唐無稽な「狂気な」ことを言ってみるならば、オリンピック選手の異常性を受け入れるなら「パラリンピックを目指し出場しメダルを獲得する競技者は、日常を生きる人間存在とは異なる」と表せる異常者であるパラリンピック選手を、そのまま（障害を克服しない姿で）受け入れるのが筋ではないかと思います。「並外れた達成をなす」ことと「身体的な障害（インペアメント）がある」という、二重の意味での“異常者”であるパラリンピック選手がそのままの姿で存在する。そんな実現不可能な世界が「本当の」良き世界なのだと思います。

３　笹谷絵里

私はこのコメントを事前に送られて読んだときに、これは、小泉先生に向けての“レベルの高いラブレター”が書かれているように感じました。檜垣先生の応答には、小泉先生への愛が書かれており、編者に「小泉先生への愛が足りないのでないか」とのコメントが書いてあった後に、小泉先生への「弟子たちの愛も足りない」ということを各章の執筆者にコメントした形の原稿になっていると思ってしまいました。ご発表も、小泉先生への愛をみんなの前で伝えておられたように私は受け取りました。

この返答に対して、私のところだけ簡単に申し上げると、本当におっしゃるように、0 か 100 の話だと思います。昔、「血筋」であったり、「血統」であったりとか言われていたことが、科学技術が開発されていくことで「遺伝情報」がわかったとき、完璧な遺伝情報を持った人がいないということは、本当にその通りです。それが分かったとき、どうしようもないことなのだと、ここにいる人たちはわかっている。檜垣先生のおっしゃる、0 か 100 かということは、まさにその通りだと思います。

ここにいる人たちは 10 時から 17 時を過ぎてもフォーラムを一生懸命聞ける狂気な人たちで、そこはもしかしたら、一般の方たちとは少しずれているのかもしれません。0 か 100 か、全員「生む」か「生まないか」というときに、ここにいる人たちはある程度わかって議論できるのでしょうが、そうでない場合は、「選べる」と思っていて、「選べる」と思っているから、高いお金を払ってでも選びたいのだと思います。選べるということが、「無理」なことで「傲慢」なことだと、ここにいる人たちは理解している。しかし、多くの場合は理解されず、選べると思っているところの差は縮まらないというところは大きいかなと思います。

「当たり前」が「当たり前でない」ということを最後に言っておくと、ここで「フーコー」

と言ったら、みんなフーコーの顔を思い浮かべてあの人だなと思うと思います。ですが、場所が変われば、「フーコー」というと「何ですかそれ？お菓子ですか？」と言われます。私がどんなお菓子だと思うのと尋ねると、「メレンゲ風の白いやつでしょ」と言われました。みんなが共有している当たり前のことが、違う世界に行くと、何のことかわからなくなってしまい「お菓子」になってしまうこともあるのかなと思います。それこそ、「狂気」と「正常」の違いではないかと考えます。

４　小西真理子

編者にまでコメントをいただきまして、ありがとうございます。まず、檜垣さんの総評について、檜垣さんが話されたこととは別の視点をもって、少なくとも私は、本書を編集したのだということを主張したいと思います。

午前中の趣旨説明で少し触れましたが、この論文集はもともと『狂気な倫理』をテーマとしていたわけではなく、小泉先生に言及することをお願いして原稿を募ったわけでもありません。執筆者の方々には「各人の本筋・本領」で論文を執筆することを依頼しました。それにもかかわらず、集まった原稿には、小泉先生の著作に言及しているものが目立ちました。研究指導でお世話になった小泉先生への有り余る感謝の気持ちや、先生に対する純粋な敬意が潜んでいるように、私には思われました。なぜ、このような原稿が集うことになったのか、このような原稿を執筆している人たちがどのような人たちなのか、それを考えることで名づけたタイトルが『狂気な倫理』です。

先端研でしばしば目にした光景として、小泉先生は、演習や論文検討会などで、研究者たちから非難を一身に浴びるような研究、そこには研究のお作法を何もクリアしてないようなものや、そのテーマを研究するための最低限の知識や技量をもってないように思われるものも含まれていたと思いますが、そのような研究をあらゆる知を駆使して擁護され、ときにはその研究を非難する研究者に痛烈な反論を繰り広げられるというものがありました。あまりに「愚か」な共依存者について研究しており、知識や技量がなかなか追いつかない私も、小泉先生に相当の擁護をしていただい大学院生の一人だったかと思います。もちろん、先生は何でもかんでも擁護されていたわけではありません。先生が擁護され、肯定されていた研究、その研究には「キチガイのタワゴト」と言われかねない、ある種の「狂気」が見られたのですが、それらを描写するにふさわしい形容詞として「愚かな」、「不可解な」、「無価値な」という語を今回採用しました。同時に、そのような研究を肯定する先生の姿にも、別の意味での「狂気」を見いだしました。『狂気な倫理』は小泉先生と、執筆者らをモデルにしたタイトルです。

このように、少なくとも編者のひとりである私は、執筆者のみなさんにもお伝えしておりませんでしたが、「小泉義之のエクリチュールに応答しよう」という観点から、この著書をまったく編集していません。私が応答したかった相手は、私が過ごした立命館大学先端総合

学術研究科で教育活動を担ってこられた「教育者である小泉先生」であり、さらには、その先生に向けて論文を書いた執筆者の想いです。もちろん、執筆者のなかには小泉先生のエクリチュールに応答しようという姿が見られたのですが、そのような観点から編集も執筆者の方々に対するコメントもしたつもりはありませんでした。私にとってこの論文集は、小泉学級の卒業アルバムのような位置づけです。そのような論集を作るためにお力添えいただいた方々がいたおかげで、企画を立ち上げる当初、人によっては無謀だと言われてしまうような（実際言われた）方向性を維持したままで論文集を完成することができました。有名人にぶら下がって「売る」ようなお決まりの手法を用いるのでもなく、正統派な執筆陣をそろえるのでもなく、卒業アルバムの雰囲気を保ったまま、それぞれの執筆者が主役となる形で本書を完成に導いたのだと、自負しております。学術的には、かなりずれた話かと思いますが。

続いて、第 1 章と第 4 章の論文に対するコメントに応答したいと思います。

第 1 章について。ここでいう「毒」が何を意味するのかがつかみかねているところがあるのですが、この論文における反出生主義的な絶望は、自己であり他者である存在としての胎児＝赤ちゃんの殺害にこそあると考えています。ここでは文字通り、妊娠した女性当人にとっては殺人がなされたということが肝心なところかと思います。そして、さらにはその殺害を通じて、母親は赤ちゃんの存在回復という生きがいを発見し、そのことがひいては反出生主義的な思想が薄れていくことにつながっています。ここにある赤ちゃんへの執着は、母子共依存的な欲求を満たすものとさえ捉えられるものですが、赤ちゃんは亡くなっているためある意味この関係性は半永久的なものと言えるものです。ご質問を受けてそこにある「毒性」がとらえ損なわれているようには思いました。それは「胎児」だからでしょうか。これが「新生児」だとしたらどうでしょうか。

第 4 章について。本章の筆頭著者は高倉さんであり、私はあくまで第二著者です。筆頭著者である高倉さんが引き受けた仕事は、毒親概念をもってなんとか社会に抗いながら生きることための理論を形成することにあったと思います。毒親論における社会経済的視点を考察するとしたら、それは私が筆頭著者になって引き受ける仕事であると考えます。

５　河原梓水

先ほど笹谷さんから、檜垣さんのコメントは、檜垣さんからの小泉先生にむけた「ラブレター」であり、「小泉先生への愛が足りない」というお叱りなのではないか、というコメントがありました。そうなのかもしれません。ただ、私と檜垣さんは師弟関係にありませんし、分野も全く違いますから、このような学問の場においては、私と檜垣さんの関係は僭越ながら、「お叱り」を頂戴するような上下関係ではなく「ピア」だと思っております。とはいえ、せっかくですので、檜垣さんのやりかたにならい、私も小泉先生にむけた「ラブレター」を書いてみました。読み上げます。

小西さんから、本論集（『狂気な倫理』）の意図として、「小泉義之のエクリチュールへの応答」を意図したものではない、という説明があったかと思います。その上で、私のほうからはあえて、小泉義之のエクリチュールを巡る応答をしたいと思います。

檜垣さんは、「小泉義之のほぼすべての主張は無理筋であり、実現不可能であ」り、したがってこれをパフォーマンスと受け取った上での応答が求められる、と述べられました。その上で、小泉義之のパフォーマンスは、ある種の矛盾を抱えた自己諧謔であり、そのやるせなさが「芸」であるから、この芸をまねることが読者にとっては重要になる、と述べられました。

この点についてのお応えとして、第一に、私（本当は私たち、と言いたいところですが、確認していないので私としておきます）は、小泉義之のエクリチュールをそのようには受け止めていません。この点はすでに檜垣さんにも伝わっていると思いますが、私は、「小泉義之のほぼすべての主張は無理筋であり、実現不可能」だと感じたことは全くありません。真剣にその主張の実現を考えています。

その上で、檜垣さんは、「小泉のパフォーマンスは「良識人ヒューマニスト」を小馬鹿にしつつ、その先をかいまみせながらも、自分自身が「良識人のヒューマニストのアップヴァージョン版」しか示せない構造になっている」と指摘します。とするならば、小泉義之の後に続く者が小泉のパフォーマンス＝芸を真似る行為とは、「良識人のヒューマニストのアップヴァージョン版」をさらにアップヴァージョンするだけのものでしかないのではないか、そのようなことをしてなんの意味があるのか、どのような展望が開けるのか、正直にいって分かりません。それは哲学業界にのみウケる宴会芸にすぎないのではないかと疑っています。

百歩譲って小泉義之が、万が一、ほぼ無理筋の主張を単にパフォームとして行っているとして、ではその目的は何かと考えたとき、それは、そのような一見無理筋にみえる、実現不可能にみえる主張を真剣に引き受け、それを真に実現しようとする者を生み出そうとしているのだとしか考えられないのではないでしょうか。仮に、小泉義之が檜垣氏の言う通り、自己諧謔をもってパフォームしているとしても、そのようなパフォームの内に存在する願いを真に受け、引き受けることが、小泉のエクリチュールに応答することだとしか思えません。

第二に、そもそも、なぜ檜垣さんが、それほど小泉義之の主張を無理筋とか、実現不可能と受け取るのか、不可解です。檜垣さんが「実現不可能」な例として挙げているのは、「たとえばすべての障害者が町中を溢れる社会」、本書の第５章、貞岡論文で主題として扱われている「子供が生み捨てられて平気な社会」ですので、これらを例に説明します。

まず、「子供が生み捨てられて平気な社会」ですが、これは小泉義之の主張のなかで最もたやすく実現できる主張の一つではないでしょうか。私は奈良・平安時代の研究もしておりましたので、前近代社会のことを常に考えています。前近代社会には、しばしば小泉義之の主張するような社会の片鱗が存在します。前近代社会には、何が何でも実子を自分で育てな

ければいけない、という規範はなく、養子をとることがごく普通の選択肢として存在しています。そして『日本霊異記』や『今昔物語集』にみえる多くの捨て子譚は、当時の人々が、捨て子を拾って養育することが十分にあり得たことを示しています。歴史的に見れば、生殖と養育はかなり簡単に分離できるとしか思えません。

そして、「障害者が町中にあふれる社会」とは、まさに前近代社会において存在したあり方でしょう。障害者や狂人の収容が始まる以前、障害者はそこら中にいたとしか考えられません。日本の中世社会では、非人集団が障害者をさらっていってしまい障害者が多数派のコミュニティが形成される状況が起こりますが、とはいえ彼らは隠されていませんし、京都を中心にいたるところで働いていたはずです（なお、この非人集団のあり方は、小泉義之が別の箇所で想像している「障害者だけで暮らす社会」（『生殖の哲学』114 頁）に接続できると思います）。

進歩史観はすでに否定されており、したがって現在の社会が最も優れた社会だとは到底考えられません。そのため私は、前近代社会が、もはや参照できない過去の時代とは全く考えていません。現代よりもましなことはたくさんありますし、そもそも価値観の激変がしばしば起こっていることが重要なことです。そして、小泉義之もまた、前近代社会のことを常に念頭においています。それは、小泉義之がしばしば、前近代の用語を文中に入れ込んでいることからわかります。一例を挙げれば、これらを救済することが国家の根本的責務だとして、小泉義之がしばしば書くところの「鰥寡孤独（かんかこどく）」（＝寡夫・寡婦・単身者）とは、古代国家の法律用語です。

とはいえ、古代・中世社会の例がどうしても荒唐無稽だと感じる方もいるかもしれませんので、現代の例を挙げます。今、「生み捨てられる社会」は、現代のほうがより簡単に実現可能と私は考えます。それは、マイナンバー制度が普及しつつあるからです。マイナンバー制度について否定的な研究者は多いですが、マイナンバー制の容認と引き換えに戸籍制度の廃棄を要求することは可能ではないでしょうか。それはマイナンバーを拒否するより利益のあることではないでしょうか。戸籍を消滅させ個人単位の登録だけの社会になれば、本書第 5 章で検討されている生殖と養育の分離にかなり近づくのではありませんか？戸籍制度の廃棄は、家制度の廃棄・婚姻不平等も一気に解決しますし、毒親と縁を切りたい子供にも有益です。全く実現すべき善である上、明治以降の浅い歴史しかない近代戸籍制度の廃棄を夢見ることがそれほど荒唐無稽だとは思えません。少なくともユダヤ人の絶滅を実現しようとするよりは荒唐無稽ではないはずです。それなのにどうしてこの程度のことが実現不可能と信じられてしまうのでしょうか。

以上をふまえ、拙稿（「狂気、あるいはマゾヒストの愛について」）に関する檜垣さんのコメントに応答したいと思います。檜垣さんは、「吾妻の民主主義的な欺瞞を含んだＳＭ論がどうあっても優勢になるはず」と述べ、「戦後民主主義はどんな言説のなかでも強いのではないか」と述べておられます。確かに、現在、言説の上では民主主義は強いかもしれません。しかし、実践ではどうでしょうか。「真性」のサディスト・マゾヒストを待つまでもなく、

ノーマルな人々の間においてすら、「民主主義的な」セックスが優勢なのでしょうか？そんなはずがないのではないでしょうか？

私は、民主的で、男女対等なセックスが優勢になる世界のほうが、全く「無理筋」で「実現不可能」なものだと感じます。異性愛にしろ同性愛にしろそうだと感じます。そんな社会は歴史的に一度も存在したことはないし、私には想像することも難しいものです。まずもって、どのように始まるのでしょうか？それはいったいどのような体位なのでしょうか？どのように同意を取れば真に相手を尊重したことになるのでしょうか？女性器と男性器をどのようにつかえば男女対等になるのでしょうか？全く見当もつきません。いろいろと語られていることは知っていますが、到底信じることができません。対等で民主的なセックスが優勢になる社会とは、「生み捨てられる社会」よりもはるかに非現実的なものではないでしょうか？

私が拙稿で念頭に置いていたことは、程度の差はあれ、古川のようなマゾヒストは実はどこにでもいるということです。暴力や支配から発する愛は、実はそこら中にありふれているものだということです。卑近な例ですが、愛する者からの「壁ドン」や、明確な同意を取らない性的接触を暴力と受け取らない者、そこに愛情を見出す者はたくさんいます。そうでないという意識は虚偽意識です。では、このような人々はまだ「目覚める」ことのできていない愚か者なのでしょうか？私はそのような考えはパターナリズムであり、傲慢だと思います。言説としてではなく、そのあり方を直視すべきです（虚偽意識に基づく議論はしないことも、小泉義之のエクリチュールだと考えます）。

重要なことは、なぜ、檜垣さんはこのような、私からすればまだまだその片鱗すら見えていない、まだまだ「荒唐無稽」と見なせる社会の到来を信じることができるのに、小泉義之の主張を信じることができないのか？ということです。この檜垣さんの姿勢にこそ、「狂気」が、フーコーのいう「「別の傾向」の狂気」があるのではないでしょうか。このような狂気をとらえ、ここに対決線を引くことが、私が考えるところの、小泉義之のエクリチュールへの応答です。「まずは自分の日常を疑う、自らの正気を疑うということからはじめられるようおすすめします」。

（かしわざき・いくこ、きたじま・かなこ、ささたに・えり
＋こにし・まりこ、かわはら・あずみ）